

---

# 埋立地

夏実 歡

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

埋立地

### 【Nコード】

N4123D

### 【作者名】

夏実 歓

### 【あらすじ】

とある埋立地で起こった出来事を怪しい男が聞いていた。その物語集と男の話

## ブローグ

作りかけの高層ビルの群れとぽっかり開いた空き地に囲まれたその場所はどんよりとした空と湿った風を迎えて、猶、独特のすがすがしさを持っていた。

行きかう人もまばらなそこは、まだ作られてあまり年月のたっていない事を示す清潔感を備えている。大きなガラスをたくさんはめ込んだ建物の横曇り空の薄暗さに、ぼんやりと街燈はその灯を燈し目の前に広がる公園との道をうつすらと照らしていた。

昼間というにはちよつとためらいたくなるような薄暗い昼下がりで、一人の男がぼんやりと港湾の続く風景を眺めている。ちよつと遠くからビル風のうなる声が聞こえ、すぐ傍らの植え込みからは草の虫の声が聞こえてくる。そんな様々な声の語る物語に男は聞き入っているのだった。

## 其の壱 人殺し達

其の壱

それは嵐の夜の事だった。轟々と風が轟き波頭は空にちぎれ飛ぶ。其の中で奴はやってきた。

打ち寄せる波に流され、テトラポットに叩きつけられたそれは複雑に組み合わされたコンクリートの林の中に身を潜めたのだった。

「おい、どうするんだよ！これ・・・」

波しぶきのかかる海岸沿いの道にバンで乗りつけた二人の男は殺氣立っていた。

「聞いてンのか・・・！どうすんだっていつてんだよ！」

チンピラのような若い男が癪癪を起こしているそのすぐ後ろ、車の後部にはうつすらと水分を含んだ寝袋が転がっている。

「うるせーぞ、ケンジ！テメーが調子に乗ってちよっかい掛けたのが始まりじゃねーか！面倒掛けやがって、その上グダグダ言いやがって！」

運転席にいた少年かさの男は唸る様に言う。ケンジと呼ばれた若い男の胸倉をつかみ頭を相手の額に押し当てながらいった。

「今からあれバラして捨てるぞ」

ケンジはガタガタと歯を鳴らして何度も頷いた。

「道具はケツに積んである。細切れにして海に撒け！解ってんだろうな、もたつくんじゃねえぞ！俺も手伝ってやる！！」

ドアに叩きつけるようにしてケンジから手を離すとケンジに車から降りるように促した。

そして、ケンジが車から完全に降りたのを見計らい男も車から降り、車の後部扉を開けて、ケンジに口の閉じた寝袋を引っ張り出させた。

「ひい！」

ずるずると引つ張り出された寝袋はどさつと地面に落ち、少し開いたその口からは人の頭が除いていた。

年かさの男は車に積んであったツールボックスから鋸とニッパーそして、ナイフと金鋤を取り出して言った。

「いちいち、ビビってたつて拉致は明かねえぞ。寝袋開ける。三十分経ったらどんな状態でもいいから海に放り込むんだ」

なかなか、動かないケンジに業を煮やして男はケンジを押しのと一気に寝袋のジッパーをおろした。

## 人殺し達2

ゴロンと転がりだしたのは少しガラの悪そうな若い女だったが、その女はもはや息をしていなかった。

男は手早く服を脱がせると下着だけになった女の死体に向かって、震えているケンジを引きずっていった。そして、荒れ狂う海に向かって女の服をまとめて投げ入れる。

そのとき、突如大きな波が襲いかかり、男の姿は消えた。

「ア、 アニキ〜！」

ケンジが驚いて、堤防に駆け寄ると、男は、堤防の裏の雨水排出口の鉄格子に掴まっていた。

「ち、ちくしょう！ た、助けてくれ、くそったれ！ 車にロープが、うわっぶ」

ケンジは慌てて、車に引き返すと車内から赤い登山用ロープを引っ張り出し、震える手で、先を捜す。夏だというのに手はガタガタと震え、強い雨が視界をふさぐ。

「早くしろ！ もってかれちまうよ」

アニキは叫んだが、ケンジの耳にはかすかに届く程度だ。嵐の海は到底人の耐えられる様なものではなく、一刻を争う。手は痺れ、息をするのも苦しい。激しい力に揉まれて自分の身に何が迫っているのかも気がついていなかった。

何度かの波を受けた後、ケンジがようやく顔を出した。

「ア、 アニキ、これを！」

ケンジはロープを投げるがうまくいかない。ただでさえ、ロープをそのまま投げてもうまく飛ばない上に、まるで暴竜のように翻る雨風がそうさせてくれないのだ。何度投げても手前で落ちてしまった。り、後ろに吹き飛ばされてしまう。かといって、錘をつけたのではアニキに当たったときが心配だった。急がなければ！ アニキはさつきからもう叫ぶのをやめている。

「そうだ！」

ケンジは閃いて、ロープの先端を輪に結びそれを投げつけた。二回三回と投げる。四回目についてアニキに届く。

「早く掴まれよー！」

ケンジが叫んだ。ロープが海中に没しようとした瞬間、アニキの左腕がロープを捉え引き寄せた。アニキは喘ぎながらロープの輪に腕を絡めた。

ケンジは濡れたロープが手からすべるのを恐れて体に結わきつけると渾身の力を込めて引き付ける。グンと重さが係りビーンとロープが緊張する。

しかし、それでも着実にロープを引き上げていく。もうアニキの体は上半身が海面から出ている。

ケンジは気付いていなかった。そのアニキの体に取り付いた怪しい影に・・・

ふいに、小さな波が憐れな犠牲者の体を嘗めると強烈な引き込みがケンジを襲った。アニキは悲鳴を上げたがその声は期中深く吸い込まれた。もの凄い力にケンジが対抗して引き直すと、がくんと言う衝撃と共に後ろに倒れこんだ。デングリ返ったその顔に、何か重い物が飛んできた。

「ぎゃー！」

ケンジの絶叫が嵐を裂いて響いた。それは肘から後ろの無くなったアニキだったのだ！

ケンジは真っ青になり、口から泡を吐き、這い蹲りながら車に辿り着くと腰に巻いたロープも開け放したドアもそのままにバツタリと倒れた。

### 人殺し達3

翌日、K県警Y署

「何があつた？」

神津こうづが署に出ると、いつに無く慌しい。

「あ、神津さん。殺しですよ」

「ほ」

神津は別段どうということなく答えた。長く刑事をやっていたればそんな事に出くわすのも騒ぐような事でもない。まあ、大袈裟な事になる事もあるが、自分はただ仕事が回ってくれば動くだけだ。

「それがですね、もう犯人と思しき男は捕まっているんです」

なんだ、もうほとんど解決じゃないかと神津は思った。しかし、それにしてもバタバタしている。だいたい、人殺しがどうと言ったって、忙しくはなるがこんなにアタフタする事でもない。その上、容疑者が捕まっているなら尚更だ。

「それじゃ、こんな騒ぐ必要は無いんじゃないか？」

「いや、なんでも、容疑者に問題があつたようなんです。尋常な様子ではないみたいですよ、錯乱していて」

「ふむ・・・尋常じゃないっていや人殺し自体が尋常じゃないんだ。チヨロイ奴だつたてことじゃないのか？もしくは薬やってたのか」

「ええ、そんなところじゃないかとも思っていますが、どうも、上からなんかあつたらしくって・・・詳しい事はワカランです」

また、ゾロ出張ってくるのか、何でかしらんが今回は嫌に手が早いんだな。神津は思った。まあ、仕事が回ってくれば動くだけ、再び自分に言い聞かす。

「なんだか、上の方はフクザツみたいですね。きっとグダグダしますよ。神津さんは切れ者だつたって聞きましたよ。イチチヨ暴れて横取りしちゃったらどうです？」



神津は不機嫌に大磯を睨むと背を向けていった。

「下らん。そんなつまらねえ事は二度と言うな」

それより、てめえの仕事をしろ！と言って去り際、脳裏に苦い思い出が掠めていた。いたずらに張り切ってまたあんな事になるのはもうごめんだ。そう、もう絶対に・・・

### 人殺し達3（後書き）

こっちはホントに更新遅くてすみません・・・（涙

## 人殺し達 4

何故だか知らないが、あんなに慌しかった騒ぎは昼になる頃にはまるで何事も無かったかの様に落ち着いていた。まるでそんな案件は最初からなかったかのようだ。

結局、忙しいタイミングにかち合って、騒々しくなったただだったのか？それとも別な何かがあるのだろうか？まあ、ほとんど解決したような事件だ。ともいつていたしな・・・

腑に落ちない何かを感じながら、神津は昼飯を食っていた。

「ちよつと、神津君？」

まるで、友達と話すような声が飯を食っている後ろの席に、ちらりともこちらを見ないでドカツと座った。神津は気にしない様な所作で目の前の物を片付け続ける。

「ああ、そうだ。別にそれでいい。そのまま聞いてくれ」

そいつは続けた。適当に飯を食いながら、ただ一方的にぼそぼそとしかし、どうやってか、確実に神津に向かい話した。内容は簡単な事だった。ある仕事についての呼び出しがあるからそれに応じるようにという事だった。そして応じなければつまらない事になると脅しめいた台詞を残し、席を立った。なぜ、直接に呼び出さないのか？あるいはその用件についての触りすらなく脅迫めいた言葉があるだけなのか、あまりのぶしつけさとまるで空気のような態度に腹立たしさと薄気味悪さを感じた。ただ、どうにしろ、自分は応じるだろうという事だけは決まったような物なので細かく考えることはやめた。

そして、昼過ぎには当然のように署長に呼び出されることになった。

## 人殺し達5

署長室に入ると中には署長は当然の事、先ほどの食堂の男と見慣れぬ男が立っていた。しかも、きつちりとブラインドがかかっている窓に顔を向けてだ。

「神津君、まずはじめにこれからある依頼を受けるか？という問いに答えてもらいたい。それが重要だそうだ・・・」

苦い顔で署長が告げる。俺に権限はないのだと表情から滲み出ている。神津は署長が小間使いにされて我慢できるような人間ではないと知っているだけに考えさせられる物があつた。

「それについては、ここに来た時点でやらざるを得ないのでしょう？どうもそういうような話し振りでしたから」

どぶさらいの様に何でもやる俺を選んで呼び出すあたり、すでに目をつけていたのだろうということは解つたような物だ。

「・・・だから、やりますよ。ええ、なんだかしらんが・・・」

男の後姿が笑つたように見えた。それも、冷たい笑いだ。男はかさつくような空気の中、空気が抜けるような声で喋りだす。

「この事件は、まだ終わって無くてね・・・ああ、この事件というのはもうご存知だろう？朝の騒ぎの奴さ　その後始末・・・正に後始末なんだがね、正直なところ、我々の仕事なんだがどうもうまく行かない事がいくつかあつてメンバーが一人かけてしまったのだよ」

「君には　君にはそのメンバーの代わりに我々のチームの一員になつてもらいたい。もちろん飯のだがね・・・なに、表向きの仕事を主に頼むつもりさ、人が足りない分そういう仕事が出来ないのだよ、今回はまあ、ちよつと仕上げの時には手伝ってもらわにやあらんだろうがね」

いろいろと都合があるのだよ・・・と後から付け加えて黙る。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4123d/>

---

埋立地

2010年10月13日21時26分発行